

必教
推助
天理
教祝
詞文
集
附
祭
典
式
全

014458-000-8

特30-215

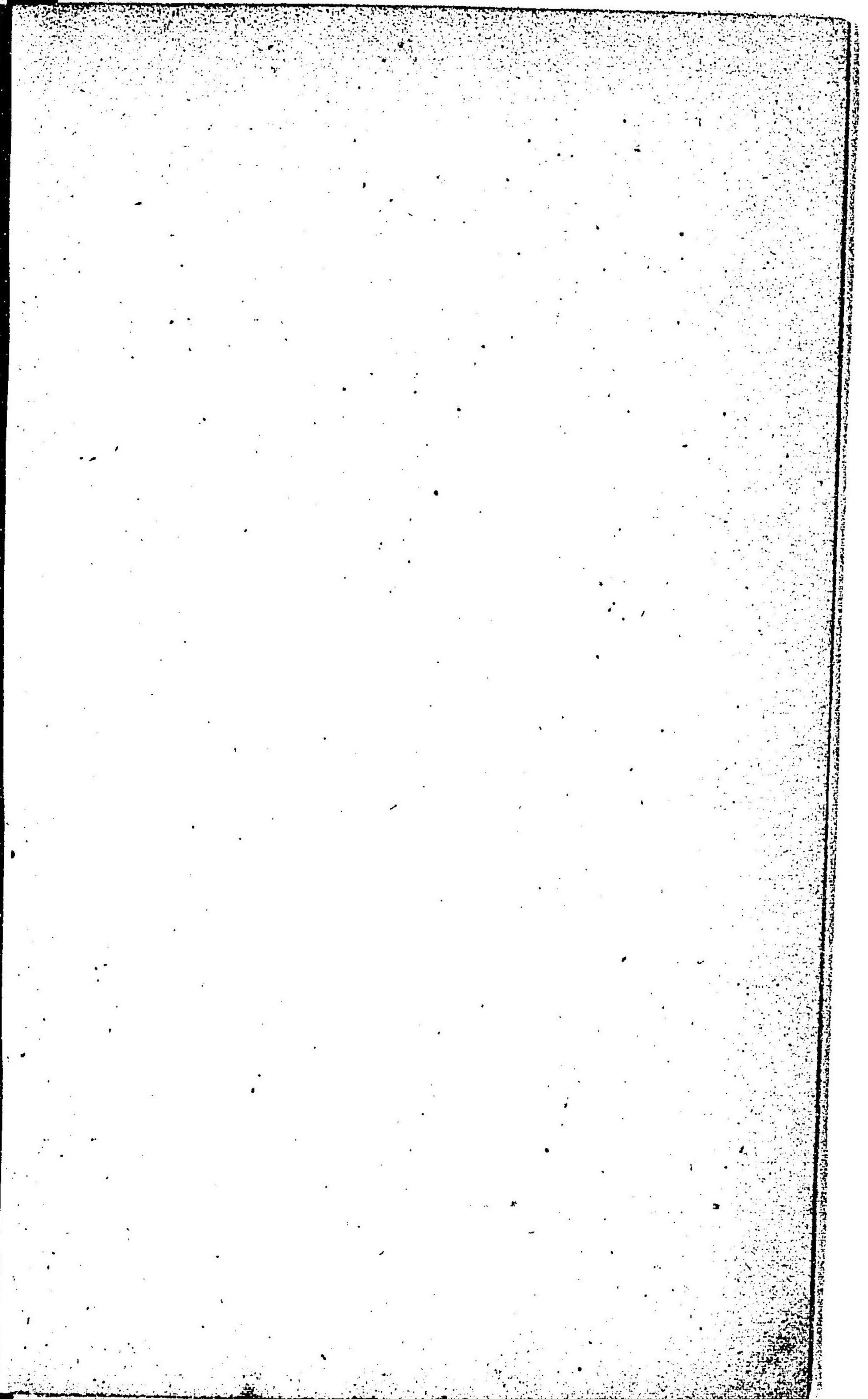
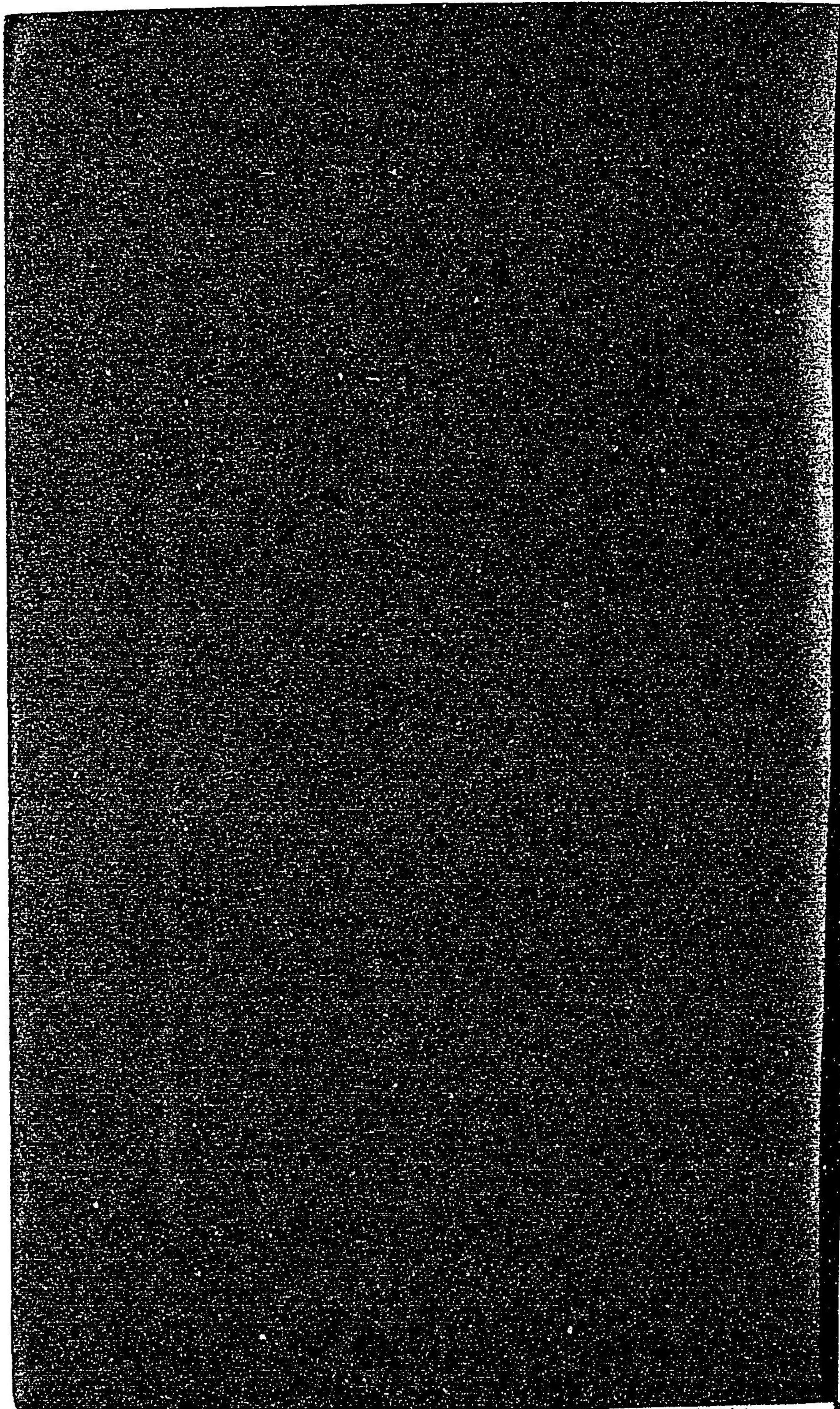
天理教祝詞文集（教職必携）

交盛館編集部／編

M34

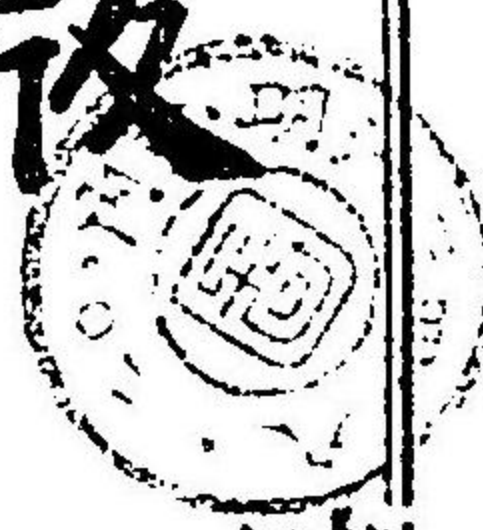
ABB-0836





教職
義携
天理教祝詞文集

明治三十四年八月出版



附
祭典式
葬祭式
并葬儀圖式

緒言

彼の豺獭すら報本反始の禮を知りて春秋に祭ることあり人にして神を祭り祖先を祀らざるは豺獭に劣るものと謂つべし此の書は祭葬に從事せんとする教師の爲めに編述せり教師たるもの宜しく本書に就いて祭葬の詞文を研究して取捨其宜しきを得ば其過なきに幾庶らん

明治三十四年六月

編者誌

必職 天理教祝詞文集

上卷目次

- 正月元日祭詞 一
- 紀元節祭詞 三
- 天長節祭詞 五
- 大婚式奉告祭詞 六
- 祈雨祭詞 九
- 除蝗祭詞 二
- 祓除詞 三
- 每朝神拜詞 四
- 教會新築地鎮祭詞 六
- 奉教主神鎮座祭詞 一六

下卷目録

- 教會開講祭詞 一八
- 教會月次祭詞 二〇
- 教會春秋大祭詞 二三
- 教會入社祭詞 二七
- 新嘗祭詞 二九
- 祓除詞 三二
- 歸幽奏上祭詞 三三
- 遷靈詞 三四

- 鎮祭詞 三五
- 發葬祭詞 三六
- 埋葬祭詞 三八
- 葬後靈祭詞 四〇
- 誄辭 四一
- 十日祭靈前詞 四四
- 全墓前詞 四五
- 五十日靈祭詞 四七
- 百日靈祭詞 四九
- 改式祭詞 五〇
- 同鎮祭詞 五一
- 教祖靈祭詞 五三

- 春秋二季靈祭詞 五七
- 日清戰爭死歿者招魂祭詞 五八
- 附 録
- 祭典式 六三
- 葬祭式 六五
- 葬祭行列
- 全圖式

目次 終

必携 教職 天理教祝詞文集 上卷

○ 正月元日祭詞

掛卷も綾に畏き天理大神と稱奉る國之常立
 神豊雲野神意富斗能地神大斗乃辨神淤母陀
 琉神阿夜訶志古泥神伊邪那岐神伊邪那美神
 國之狹土神月夜見神十柱の大御神の御前に
 畏み畏みも白さく今日はしも明治何十年
 の新玉の年の始めと大前を稜ひ清めて朝日
 の豊榮登に奉る幣帛は由紀の御食御酒は甕

閉高知甕腹滿雙て大野原に生物は甘菜辛菜
 青海原に住物は鱧の廣物鱧の狭物奥津藻菜
 邊津藻菜に至る迄に如横山置高成て奉る幣
 帛を安幣帛の足幣帛と大神等の御心に平く
 聞知食て天皇が朝廷は彌高に彌廣に五十櫃
 八桑枝の如く立榮て茂御世の足御世の大御
 代と幸へ奉給て天下公民の手肱に水沫畫垂
 り向股に泥畫寄て取作む穀物は惡風荒雨に
 不相給是の御前に仕奉る教徒の男女に至る

迄正さ直き眞心に成幸へ玉ひて家内平穩し
 く子孫に八十續彌遠永に令富榮給へと十六
 事物膝折伏宇自物頸根突拔て稱言竟奉くと
 白す

○紀元節祭詞

掛卷も畏き天理大神と稱へ奉る國之常立神
 豊雲野神意富斗能地神大戸乃辨神淤母陀琉
 神阿夜訶志古泥神伊邪那岐神伊邪那美神國
 之狹土神月夜見神十柱の皇神等の御前に教

正何某畏み畏みも白さく今日はしも言巻も
 恐けれども皇祖神倭磐余彦の命の天津日嗣
 高御座の業を畝火の檜原の大宮に座坐て所
 知食し日なるとを以て此の教の庭に四方の國
 より教導職諸集ひて御酒御食海川山野に生
 る種々の物を捧げ奉り賑々しく御祝典仕奉
 るを所聞令て皇御孫命の大御代を手長の大
 御世と天地日月と共に長に窮無く齋ひ奉り
 國中の公民は和ひ樂みて令仕奉給へと畏み

畏みも言祝ぎ奉らくと白す

○天長節祭詞

此の神床に鎮り坐す掛巻も畏き天理大神と
 稱奉る國之常立神豊雲野神意富斗能地神大
 戸乃辨神淤母瓊琉神阿夜訶志古泥神伊邪那
 岐神伊邪那美神國之狹土神月夜見神十柱の
 大神等の御前に慎み敬ひ畏み畏みも白さく
 八十日日は在ども今日は畏くも現津御神と
 大八洲國所知食す養徳根子天皇の生出給ひ

し最も愛たき尊き日なるを以て是の大前に
 禮代の幣帛を捧げ奉りて御祝典仕奉らくを
 所聞食て皇美麻命の大御壽を手長の御壽と
 湯津磐村の如く茂御世に幸へ給ひ天下の大
 政は平けく安けく所聞食べく守護奉り幸へ
 奉り給へと畏み畏みも白す

○大婚式奉告祭詞

掛巻も畏き太も貴き天理大神と稱へ奉る國
 之常立神豊雲野神意富斗能地神大戸乃辨神

淤母瓊琉神阿夜訶志古泥神伊邪那岐神伊邪
 那美神國之狹土神月夜見神十柱の皇神等の
 大前に教會長教正何某畏み畏みも白く言巻
 も畏かれども現津御神と大八洲國所知食す
 倭根子天皇の天下の政事は獨可所知物不有
 必ず斯理幣の政事可有と宣賜ひ勅賜ひて皇
 后宮を立賜ひ定賜ひてより天に日月如在地
 に山川如有二並の筑波山なす並坐て大御世
 の足御世と天下の公民諸を撫賜ひ治め賜ひ

し年月累り積りて今年ことしの春はるは二十年はた餘り五いつ
 年の御祝典みづきの式行のりはせ賜たまふ年に成なりぬれば御み
 園そのに咲さか匂におふ梅花うめも時知顔ときに色香いろも常つねに勝まさり
 吳竹くれに峙たけを占しむる鶯うぐいすも聲こゑを改あらためて萬歳まんざいを唱との
 ふ成なるべし況ましてや教導かう職のつに列つられる者ものは三月
 の九日ひの日ひと生日いくの足日たるの吉日よきと大前おほを持もち
 齋い回まわり清回まよりて御祝典みづき祭仕奉つがへらくと奉たてまつる幣みて
 帛ぐらは由紀ゆきの御食みけ御酒みさは甕閉みかのへ高知たかい甕腹みかのはら満並みちて
 鱈はたの廣物ひろ鱈はたの狭物さ沖津おき藻菜つ邊津へ藻菜つ甘菜あま辛から

菜なを始はじめ種々くさの田た奈津物なつを机代つくわに置おき高成たかて
 奉たてまつる幣帛みてを安幣やす帛ぐらの足幣たり帛ぐらと平ひらけく所聞食きこ
 て兩陛下ふたの大御壽おほと千代ちよに八千代やちよに小礫石こ
 の巖いはと成なりて苔こけの産むす迄常磐までに堅磐かきに守給まもりひ
 幸給さいへと開手ひらを亮々やうに拍上うらげ畏かしみ畏かしみも白ま
 す

○祈雨祭詞

此所このに天理てん大神おほと持崇もちく掛卷かけも綾あやに畏かしき國
 之常立神この豊雲野神ゆき意富斗能地神い大斗乃辨神おほ

淤母陀琉神阿夜訶志古泥神伊邪那岐神伊邪
 那美神國之狹土神月夜見神十柱の大御神の
 御前に白さく此頃久く雨降す日の累れば植
 し田も蒔し畠も凋み枯なんと爲が故に百姓
 等憂左麻與比爲術不知木草の葉の萎むが
 如く仰て待天津水を大神等相諾ひ給て高山
 の末短山の末より雨雲立上り光る鳴神波多
 多伎て速雨頻に令降て貯る端山の池は堤に
 湛へ塞上て麻加須流水は田毎に満て百姓の

作と作物は五穀を始めて草の片葉に至まで成
 幸へ給へと禱白す事を所聞食と恐み恐みも
 白す

○除蝗祭詞

掛巻も畏き天理大神と稱へ奉る國之常立神
 豊雲野神意富斗能地神大斗乃辨神淤母陀琉
 神阿夜訶志古泥神伊邪那岐神伊邪那美神國
 之狹土神月夜見神十柱の皇神等の大前に何
 教會長教正何某畏み畏みも白さく百姓等が

取作とりつくる穀物たなつものは大風大雨おほいぜおほあめの荒あちび無なく早魃ひでりの災わざわひ
 も無なく繁茂しげりて今年ことしの秋あきこそは饒ゆたかに稔みのりて
 篝かたまにも満みて車くるまにも載のするならむと喜よろこび勇いさみ
 つゝ在ありしに此頃このころ遠はるかに蝗いせむし涌あふて害わざはひを爲なす事こと夥おび多た
 しく夜よに日ひに之これを拂はらひ除のぞくに違いさまなく憂うれひ苦くる
 みにけり此は皇神等すめみかたちの御心みこころに協あははぬ事こと有ありて
 然しからむも知しるべからず故爾かれこゝに御酒御食種々みさけくさくの
 物を供そなへ奉まつりて御祭仕奉まつりつかへまつる状さまと平たいらげく所聞きこし
 食めして蝗いせむしの災わざわひを拂はらひ除のぞき奥津御年おくつみとしを八束穂つかほの

茂穂いかしほに成幸なしたまはへ給たまへと慎つしみ畏かしみて稱辭たへこと竟ま奉まつら
 くと白ます

○禊除詞

此所このところを伊豆いづの磐境いわさかいと掃はらひ清きよめて神籬ひな立たて招ま
 請奉のみまつり令坐奉たましめまつる瀬織津比咩神速せおりつひめかみはや開津比咩神あきつひめかみ
 氣吹戸主神速いふきどぬのかみはや佐須良比咩神等さすらひめかみたちの御前みまへに白まさ
 く遠津神代とほつかみよに伊邪那岐大御神いざなづきおほみかみの筑紫つくしの日向ひむか
 の橘たちばなの小戸おとの阿波岐原あはづきはらに至いたり坐まして禊みうぎ禊みうぎ給たまひ
 さ故かれ此古事このふることに依よりて禊みうぎ禊みうぎ仕つかへ奉まつるに依よりて奉まつる

幣帛は御食御酒海山川野に生る種々の物を
 横山の如く置高成て奉ると平けく所聞食て
 今日御祭典仕へ奉らんとて教の庭に集侍
 と教導職諸の過犯けむ雑々の罪穢を穢ひ給
 ひ清め給へと申す事の由を四柱の大神等天
 班駒の耳彌高に振立て所聞食と畏み畏みも
 白す

○毎朝神拜詞

此の神床に齋ひ奉る掛巻も畏き天理大神と

稱へ奉る十柱の皇大御神の御前に白さく大
 御神の御道は千代萬世に無極天地と共に榮
 えしめ給はむ事は申すも更なり天日嗣の所
 知食す大御世を堅磐に常磐に茂御夜の足し
 御世に幸へ給ひ何某家内の諸人親族諸の禍
 事有せず過犯す事の有むをば見直し聞直し
 坐て夜の守日の守に守給ひ幸へ給ひて我爲
 す業を彌契めに契め給ひ遠長く恩頼を蒙ら
 しめ給へと畏み畏みも拜み奉らくと白す

○教會新築地鎮祭詞
 掛巻も畏き大地主神の御前に白さく此の所
 を選定めて何教會を新に建むと齋鋤齋鋤を
 取持て石切平均地曳平均掃ひ清めて捧る御
 酒御食海山川野の物を机代に置高成て奉る
 幣帛を平けく所聞食て此の新墾地の底津磐
 根の極み下津綱根波府虫の禍無く夜の守日
 の守に護給ひ矜み給へと畏み畏みも白す

○奉教主神鎮座祭詞

掛巻も畏き天理大神と稱へ奉る十柱の皇大
 御神の御前に稱言竟奉くと白す皇大御神等
 の御道を天理教祖眞道彌廣言知女命の導さ
 教へ給ひし隨に神習ふ教徒の殖擴りて最も
 隆盛に成にけり是以て宮地を選定め掃ひ清
 て下津磐根に宮柱太敷立高天原に千木高知
 て瑞の御殿仕奉さ故神籬結固め御船代に載
 奉て幸行の道の守と教導職等警固めて烏羽
 玉の夜吉と人の熟寐爲る亥時に人垣立て何

教會長教正姓名皇神の御尾前に仕奉り新宮
 に遷奉て奉る幣帛は田紀の御食御酒は甕邊
 高知甕腹滿雙て山野の物は甘菜辛菜青海原
 物は鱈の廣物鱈の狹物奥津藻菜邊津海菜に
 至迄に如横山置足はして奉る幣帛を安幣帛
 の足幣帛と平げく所聞食て天地日月と共に
 彌遠長く鎮座と十六自物膝折伏鶴自物頸根
 突拔て稱言竟奉くと白す

○教會開講祭詞

掛卷も畏き天理大神と稱へ奉る國之常立神
 豊雲野神意富斗能地神大斗乃辨神淤母陀琉
 神阿夜訶志古泥神伊邪那岐神伊邪那美神國
 之狹土神月夜見神十柱の皇大神等の御前に
 畏み畏みも白さく八十日日は在ども今日を
 生日の足日の吉辰と選定めて開講の祭典仕
 奉らむとて御酒御食海山川野に生ふる種々
 の多目津物を供へ奉る幣帛を平げく所聞食
 て此の教の場に集る諸人は教祖の説諭し導

さ給へる御教を堅守りて外國の蟹が行く横
 佐の道に惑ふ事なく神隨直き正しき神代の
 御手振に習ひ奉り皇大神等の御道に専ら遵
 ひ奉りて清き明き倭心の眞心に成幸へ給ひ
 て彌遠永に五十櫃八桑枝の如く立榮えしめ
 令仕奉給ひて顯世と幽世との別なく誘ひ導
 さ坐て夜の守日の守に護恵み幸へ給へと何
 教會長教正姓名畏み畏みも白す

○教會月次祭詞

掛卷も畏き天理大神と稱へ奉る國常立神豊
 雲野神意富斗能地神大斗乃辨神淤母陀琉神
 阿夜訶志古泥神伊邪那岐神伊邪那美神國之
 狹土神月夜見神十柱の皇神等の大御前に教
 會長教正姓名畏み畏みも白さく八十日日は
 有ども今日はしも其昔し教祖眞道彌廣言知
 女命の神憑ありて御教を説き始め賜ひし日
 なるを以て生日の足日と撰定めて御祭典仕
 奉る禮代と奉る者は奥山の五百枝眞賢木を

根堀ねこじに持もち來きて青幣あをへい帛き白幣しろへい帛き八咫鏡やたがみを取とり著つけ
 荒布あらかたへ和布にぎたへと立たて奉まつり八取やとりの机つくえに置おき備うなへて奉まつる
 物ものは御饌みけ堅鹽きたしほ鏡餅かみもち鮑魚あわび鯉こい御酒みさけは甕戸かまの高知たかしり甕腹かかの
 滿並みちならへて大海原おほわたのほらに住すむ物ものは鱈はたの廣物ひろものと鯛魚たひのうな鱈はた
 の狹物せものと雜魚くさぎのうな海底うごに生おほる者ものは奥津おく藻葉しほ邊津へつ
 藻葉もは野山のやまに翔かる物ものは雉子さき大野原おほのほらに生おほる物ものは
 甘菜あまな辛菜からなに至いたるまで横山よこやまの如ごとく打積うちつみ置おきて進たて
 奉まつり漏落もれ落ちむ事ことをば見直みなおし聞直きなおし坐まして如ごとく進たて
 宇豆うづの幣帛へいを平たいらげく安やすげく安幣帛やすへいの足幣たるへい

帛きと聞看きみし受賜うけたまひて天皇すめらみが御命みことに坐まし御壽いのち
 を手長ながの御壽おほみのちと湯津磐村ゆついわむらの如ごとく常磐とこしほに堅磐かき
 に伊賀志いがかし御世みよに幸さきはへ給たまひ天下あめのいた四方國よものくにの百姓おほみたら
 の長平ながたいらけく作食つくりたぶる五穀いつのたなつものを豊ゆたかに令榮さかへ給たまひ又教またをしへ
 徒等こたちの家いへにも身みにも枉事まがみことなく病やましき事ことなく
 護惠まもりめぐみ幸さきはへ給たまひて此教このをしへの爲ために太ふとさ雄々おととと
 功績いさなと令立たてしめ給たまへと頸根うなね突拔つきつききて畏かしこみ畏かしこみ
 も白ます

○教會春秋大祭詞

挂卷も畏き天理大神と稱へ奉る國之常立神
 豐雲野神意富斗能地神大斗乃辨神淤母陀琉
 神阿夜訶志古泥神伊邪那岐神伊邪那美神國
 之狹土神月夜見神十柱の皇神等の大御前に
 教會長教正何某慎み敬ひ白さく皇神等の奇
 靈に妙なる天津御量を以て水月如す浮漂ふ
 國地を堅め修り千劔破荒振神言問ふ岩根木
 根青水沫の類を平げ和し賜ひ令言止賜ひ愛
 しき蒼生の病を療する方と昆蟲の災を攘ひ

呪の法を導き給ひて今に至る迄百姓等其恩
 頼を蒙り奉るを辱なく尊みつゝ八十日日は
 有ども今日の生日の足日を吉日の吉辰と年
 毎の御祭日と撰み定めて奥山の眞拆木を根
 堀に持來て二所に分立て神籬波夜志齋ひ奉
 り青幣帛白幣帛取置持清麻波利持忌麻波利
 仕奉り大御酒は甕瓮高知り甕腹滿並べ大食
 洗米時の菓種々に大海原に住物は鱧の廣物
 鱧の狹物海底に生る物は荒和布若和布の奥

津藻葉邊津藻葉に至る迄に今日の禮代御饗
 の物と満並べ貢奉るを安幣帛の足幣帛と平
 げく安らげく聞食して皇美麻命の知看す大
 八洲國は堅石に常石に奥山の巖の如く苔の
 生す迄動ぎ無く大御世を彌榮に榮えしめ賜
 ひ又教徒等は清く正しき眞澄鏡の眞心を以
 て君と親とに事へ夫婦の道は申すも更なり
 假初にも人の人とし行ふべき正しき道を守
 りて教祖の導き賜へる惟神の大道に遵ひ奉

りて太き雄々しき功績を令立給ひて教徒等
 の家にも身にも枉事有せず夜の守日の守に
 護り幸へ給へと畏み畏みも白す

○教會入社祭詞

挂卷も畏き天理大神と稱へ奉る國之常立神
 豊雲野神意富斗能地神大斗乃辨神淤母玳琉
 神阿夜訶志古泥神伊邪那岐神伊邪那美神國
 之狹土神月夜見神十柱の皇神等の御前に教
 會長教正姓名畏み畏みも白さく是の御前に

集侍うごなまと何某等なにがしは先祖さきつより佛法ぶつぽう以て御葬事みはらひも
 御祭祀みまつりに仕へ奉り來ぬるを今回このたび教祖をしへのおやの説ことき
 遺し給へるたま惟神いひまがらの直なほき正ただしき大道おほみちを聽きき侍ほべ
 りて最いそも尊たふき事ことと悟さとり悦よろこび辱かたじけなしつる隨まにに
 今日けふと始はじめと是こゝれの教會きやうかいに加くははりて皇神等すめみかたちの
 御掟みづきの隨まにまに神習かみならひに神習かみならひ國くにの爲ためめ世よの爲ため
 に眞澄鏡まますみの曇くもりなき赤あかき誠まことの大和心やまとこころを振起ふりおこし
 て外國とこくにの穢きたなき異教けいせをしに相率あいまり相口會あいくちあふ事こと無なく
 此教このをへに功績いさほを令立賜たてしめたまひて家内いへうちに災わざはひなく病やまし

き事無なく彌遠いやは永ながに令仕奉給へと畏おそみ畏おそみも
 白まをす

○新嘗祭詞

挂卷かけまきも畏かしこみ天理大神てんりのおほみかと稱なづへ奉りて此これの所ところに
 齋いはひ奉る十柱じゅうしちうの皇神等すめみかたちの御前みまへに教正姓名きやうせいせいせい畏
 み畏おそみも白まをさく今年ことし今月ことづき今日けふを生日いっぴの足日たるひ
 と齋いはひ定さだめて新嘗祭にいひなめまつり仕奉つかへまつるに依よりて奉たてまつる幣帛ひては
 黒酒くろさけ白酒しろさけと甕閉みかのへ高知甕腹たかちしりみかのはら満み並ならべ此郷このさとの百姓おほみたら
 の取作とりつくる奥津御年おくつみとしの懸税かけちから千税ちから餘あまり五百税いほちからを横よこ

山の如く置足はして奉る幣帛を安幣帛の足
 幣帛と平けく所聞食て皇御孫命の御世を手
 長の御世と堅磐に常磐に茂御世に幸へ給ひ
 阿禮坐皇子等をも長く平けく護幸へ給ひ百
 姓の取作む五穀を始め草の片葉に至る迄悪
 風荒水に不令相給成幸へ給へと稱言竟奉く
 と白す辞別て白さく教徒男女諸の咎過將有
 とば見直し聞直し坐て夜の守日の守に守給

へ矜給へと膝折伏頸根突拔て稱言竟奉くと
 白す

天理教祝詞文集 (上巻終)

天理教祝詞文集下巻

○葬祭祝詞

○穝除詞

掛巻も畏き神伊邪那岐命筑紫の日向の橘の
 小戸の檍原に禊穝ひ給ひし時に生坐せる穝
 戸四柱の大神等の御前に畏み畏み白さく此
 の家内に在りと在る諸の禍事罪穢を穝ひ給
 へ清め給へと申す事の由と所聞食せと畏み

畏みも白す

○歸幽奏上詞

掛巻も畏き天理大神と稱へ奉る十柱の皇神
 等の御前に畏み畏みも白さく何某今年の春
 の半より心氣不例日に病症の募りければ親
 族打集ひ醫師禁厭の術をら盡しよかども壽
 命の限にや今日の黄昏に何十歳を期として
 幽世に歸ぬるを大神等の知食て廣き御心に
 矜み賜ひ過犯けむ種々の罪穢有むをば見直

し聞直し給ひて冥府に導き給ひて高き恩頼
 を蒙らしめ給ひて彌遠永に令仕奉給へと御
 酒御食種々の多目津物を捧げ奉りて畏み畏
 みも白す

○遷 靈 詞

故姓名の靈の御前に白さく汝命は惜しくも
 現世と身退り坐しぬるかも親属等の心には
 幾千代經ぬ後も如是なから仕奉らまく思へ
 るも現世の限あれば葬儀仕奉らくを所聞食

と白す如此所聞食しては汝靈魂を新に造仕
 奉る此の靈靈に留り給へと齋主教導職何某
 畏み畏みも白す

○鎮 祭 詞

此の小床を拂ひ清めて招奉る何某の靈前に
 教導職姓名畏み畏みも白さく汝命の現世に
 在坐し時の功德を子孫の彌遠永に知らしめ
 稱へ奉らむ御名として何命と謚を奉りて此
 の靈屋に齋ひ奉り鎮め奉りて種々の物を供

へ奉り仕奉る事状を所聞食して是の家の守
 護神と此の靈屋に千代常磐に鎮座坐して夜
 の守日の守りに護り幸へ給へと畏み畏みも
 白す

○發葬祭詞

故何命の靈前に齋主教正姓名畏み畏みも白
 さく汝命の現世に在坐せし間は教の爲めに
 身と委ね道の爲めに心を盡し賜ひければ遠
 近の人等は皆喜び合ひて彌遠長に存へ坐せ

かしと思欲しつゝ在ける然有れども現見
 の世は敢果なくて此の明治の三十四年の去
 にし三月の半より病に罹り賜ひ此の何月何
 日の日齡六十歳にして逝水の逝きて歸らぬ
 八十の垵路に旅立せぬは最惜しき事にな
 り斯在れば今日しも親族等打集ひて終の御
 祭仕奉らくと御酒御饌種々の物供へ奉らく
 を甘らに平けく所聞食せと白す斯くて是よ
 り冥府に到り坐して神と成給なば前に鎮ひ

奉りし分靈の神と共に家の守護神と坐して
諸の禍事在らせず子孫の八十續常磐に令立
榮め賜へ又出立せ奉らむ行手の道も狭に立
並びて送り奉る状と平ゆく安ゆく見曾なは
して御心も穩に出立ち坐せと白す

○埋葬祭詞

故何命の靈前に齋主教正姓名畏み畏みも白
さく汝命や先頃より苦瀬に落ちて病臥しつ
坐しければ親族等打寄りて憂ひ歎き薬師

の所為は申すも更なり年來尊めると天理大神
を乞祈奉れと顯世の限や有けむ終に幽冥に
罷坐ぬれば皇御國の御法の隨に御葬儀仕奉
らむとして種々の行粧物持列並めて誘導さ
奉り此の葬場に大柩を昇居え奉りて御酒御
饌種々の物を机代に置高なして供へ奉り長
き世の御別れと玉串を捧げて告奉らくは如
此居置き奉る大柩をば親族寄集ひて慎みに
慎み手も柔に持擔ひて代々の墓所に修成せ

と奥津城に嚴重に理め奉らくと仕奉らくを
所聞食し諾ひ賜ひて冥府に伊行ぎ到り坐せ
と畏み畏みも白す

○葬后靈祭詞

此の小床に齋ひ奉る何命の聖前に齋主教正
姓名白さく今し御葬儀漏れ落る事あく事畢
へつれば後取收めて家の内外を稜ひ清めて
御祭仕奉るとして御酒御饌海山川野の種種
の物を机代に横山の如く置高なしと供奉る

を安げく聞食受け賜ひて此の家の守護神と
坐して常磐に堅磐に家内に諸の禍事在らせ
す夜の守日の守に守賜ひて親族等の行末幸
く時々御祭美しく仕奉らしめ給へと白す

○誄辞

故何命の靈前に齋主教正姓名白さく汝命は
も顯世に在坐せし間教め爲め道の爲めに心
を盡し彼方此方を奔り巡りて親しく説諭し
て怠惰る事無く坐しける然有れども現見

の世は果敢なくて明治の三十四年の去にし
 彌生の半より苦瀨に落ちて病臥しつゝ坐し
 つれば親族等打寄ひて月頃相親める醫師に
 請ひ年來尊信めると天理大神に乞祈奉りつゝ
 漏る事なく盡しゝかども御命の限にや此の
 明治の何年何月何日の日の明時に齡六十歳
 を此世の期として春雪の消え融くゝ如く還
 らぬ旅路に上り隠去に坐しゝは悲しとも悔
 しとも今日より汝命の御言は不聞や成あむ

明日より汝命の御姿は不見や成なむと親族
 等は暗夜に燈火の消えし如く渡りに船を失
 ふが如く言ひ方爲む方不知愁ひ惑ひ哀み慕
 ふに不忍故に暫時もとて御姿の儘仕奉らむ
 と思欲へども顯世の定例有れば皇御國の御
 掟の隨に御亡骸を搔き擧げて取り歛め埋葬
 の神事治奉り御酒御饌海山川野の物を供へ
 奉る状を所聞食して子孫の八十續彌遠長に
 令立榮賜へと鶉成す伊波比回り誅辞白さく

を平げく聞食せと白す

○十日祭靈前詞

是これのお小こ床とこをを靈たま床とことと絹きぬ垣かき装ようひひ高たか座くら置おき居すてて令ま坐しま
 奉まつ鎮しづめめ奉まつるる何なに命みことのの御み靈たまのの御み前まへにに齋いはひ主ぬし教おしへののみ正ただ姓せう
 名な畏おそみみ拜おろがみみもも白まささくく安あ波な禮れ汝な命みことのの葬はな儀わざはは仕つかへ
 奉まつつつるるにに今け日ふはは早はや十じゆ日かのの御み祭まつりとと成なりににたりたり如か
 此こてて思おしひひ返かへすすににもも御み病やまひのの床とこにに倚より臥ふしし給たまひひてて
 よりより後のち日ひ々々並ならてて夜よににはは九くの夜よ日ひににはは十じゆ日かとと定ただ
 かかにに計かぞへへもも敢あへざざるる間まにに御み病やまひ甚いもも革あらたまりりてて然さ

ななががららにに回かへしし奉まつららむむ術すべもも無なくく停とどめめ奉まつららむむ由よし
 もも無なりりしし事こと状まここそそ敢あへななくく悔くししくく畏かしこかりりけれれ
 然さるるをを今いま十じゆ日かのの祭まつりのの日ひささへへ跡あと追おひ及およくくがが如ごとくく
 週しゆりり來きぬぬるるにに沫あは立たししくく騒さわぎぎてて鎮しづままららぬぬ意こころをを
 押おへへてて謹つしみみ畏おそみみもも祭まつ典つり仕つかへ奉まつるる事こと状まをを安あ波な禮れ
 とと見み會あははしし自おの然づこ會あ々々呂ろにに須す佐さびびてて禮れいああくく
 過あやたたむむ事こと等らはは廣ひろきき御み心こころにに見み直ただしし聞き直ただしし相あ諾うづな
 ひひ給たまへへとと例たぐのの任まにに御み饌け御み酒さけ海うみ山やま川かは野ののの物ものをを
 机つく代しろにに捧さげげ高たか成なし奉まつるる置おてて畏おそみみ畏おそみみもも白ますす

○同墓前詞

此岡の繁木か本を刈拂ひ底津石根堀て築固
 め成し治め奉れ何命の奥津城の御前に拜
 みも白さく汝命を是の地に收め奉り竟て今
 日十日の御祭典仕奉るに依て都々羅々に思
 ふに汝命の現世に在坐る時は父母に仕へて
 人たるの道を盡し同胞を慈み貧しき人を見
 ては憐み玉ふなど功績多ければ近き里の人
 々は打集ひては汝命のことを談り合ひて涙

を流し御命の長からさりしを惜まぬものは
 無く斯る尊き御心なる汝命の宇豆の御身に
 て其御齡の千引磐にも常磐木にも肖給は
 ざりしこそ術も無き現身の慣ありけれ故底
 津石根深く忍び奉り繁木の梢高く仰ぎ奉り
 て祭典仕奉らくを聞食せと教正姓名畏み畏
 みも白す

○五十日靈祭詞

何命の神靈の御前に教正姓名謹み敬ひ畏み

畏みも白さく汝命伊去にし何月何日の黄昏
 に神避坐しよより朝な夕なに惜しく歎き悲
 みつゝ在る間に今日は五十日の御祭典仕奉
 る日と成ぬ斯在れば汝命の靈牌を靈舎に遷
 し奉りて遠津御祖等と共に彌遠長に仕奉ら
 むとして親族等打集ひて奉る御饗を平かに
 安かに聞食して汝命の元津靈は冥府に歸り
 鎮り給ひ分靈の神は此の家内に往來坐して
 諸の禍事有せず常磐に堅磐に守護給ひ又子
 孫の八十續家業を失ふことなく太き雄々し
 き功績を立しめ給ひ夜の守日の守に守り幸
 へ給へと畏み畏みも白す

○百日靈祭詞

何命の神靈の御前に教正姓名畏み畏みも白
 さく汝命の神避り坐しよより歎き慕ひつゝ
 在る間に月日の經往くこと矢の如く今日は
 じも百日と云ふ日に成ぬ斯在れば御祭典仕
 奉らむとして御酒御食種々の物を机代に置高

成して供へ奉るを平かに聞食して此の家内
を守護給ひて諸の禍事無く邪神の言む邪教
に惑事無く家門高く彌向榮に令立榮給ひて
時々の御祭典美しく令仕奉給へと畏み畏み
も白す

○改式祭詞

何某の遠津御祖代々祖等の神靈の御前に教
正姓名慎み敬ひ白さく祖等の知看す如く皇
御國は上津代より惟神の道にして上も下も

専ら神に仕奉り來ぬるを三粟の中津代より
蟹が行く横佐の道參來て御葬事も佛法の隨
に仕奉て外國風の異き名を贈て時々御祭
祀をも法師等に委て治め奉りき斯く神事の
廢れたるを古に復し賜ふ新しき大御代の大
御規を畏み奉りて年永く穢し奉りし佛風を
殘る隈なく改め正して清き正き大御國風に
遵ひ仕奉る狀を甘らに聞食して御心も穩に
相諾ひ給へと畏み畏みも白す

○同鎮祭詞

何某遠津御祖代々の祖等の神靈の御前に教
 正姓名畏み拜み白さく皇大御國の古き御手
 風に復し給ふ大御規の任に今日を吉日の吉
 辰と撰定め新に造仕奉る靈舎に汝命の神靈
 を安置奉り鎮め祭りて御酒御食海山川野の
 物を供へ奉らくを御心も穩に聞食給ひて此
 の家内を守り給ひ家業をも彌獎めに獎め給
 ひて子孫の八十連聯に常磐に堅磐に令立榮

恵み幸へ給へと畏み畏みも白す

○教祖靈祭詞

此の小床を拂ひ清めて招奉り令坐奉る教祖
 眞道彌廣言知女命の御靈の御前に教正姓名
 慎み敬ひ畏み白さく汝命の現世に坐して惟
 神の道の妙ある由緒を眞澄鏡の眞佐夜迦に
 神憑令悟給ひて天保九年十月廿六日己來五
 十有餘年の久しき一日の如く倦々惰り賜ふ
 事無く専ら教の爲に身を委ね道の爲に盡し

賜ひ其間往々警官の嫌疑を受け賜ひて或は
囹圄に苦難の日を送り給ふ事ありしも道の
爲には厭ひ給ふ事なく坐しけるに惜しくも
明治の廿年一月廿六日俄かに御容体の變り
て齡九十歳を此世の期として幽世に神避り
坐しぬれば親族は申すも更なり教徒等は四
方八隅より集ひ來りて御枕邊に棲違ひ御脚
邊に匍匐ひて聲を揚げて叫び悲み暗の夜に
燈火の消え失せて行手の道の辨へざる如く

憂へ悶へつゝ在ける斯くては汝命に仕ふる
道にあらじと焼太刀の利心振ひ起して力を
戮せ心を協せて説き遣し賜へる御教を傳へ
ければ年と共に隆盛に趣き汝命の御教は天
下四方の國に滿擴とりて教徒の數は他教を
凌ぐに到りたるは全く汝命の幽世に坐して
此の道を守り幸へ給ふ恩頼に依れる事と嬉
み辱なみ思ひ給へらるゝ謝を申し御祭仕奉
らむとして例の隨に御酒御饌種々の物を奉

状を見曾なはして御心も和親に平けく所
 聞食して御前に集へる教徒等を今も往前も
 彌助けに助け給ひ彌獎めに獎め給ひ彌廣に
 導き給ひて妖鬼の禍事有せず夜の守日の守
 に守幸へ給ひて彌益々に此道に功を立しめ
 賜ひ異き邪の道の佐霧成滿廣とれを朝風
 夕風の吹放つ事の如く拂ひ給ひて神隨の大
 道を一向に令立榮給へと畏み畏みも白す

○春秋二季靈祭詞

此の靈舎に齋ひ奉る何某の遠津御祖代々の
 祖等の神靈の御前に教正姓名慎み拜み稱言
 竟奉らくは汝命等の事始て授賜ひし厚き功
 績はしも著るく香はしく清き赤き眞澄鏡の
 曇まく眞心以て家門を定め給ひ掟給へる事
 はしも奥山の巖の動き無く代々立榮えて今
 の主に至る迄家内に禍事無く豊けく榮ゆる
 は専ら汝命等の高き尊き恩頼を蒙れるにあ
 り斯在れば其恵の百千が一も報ひ白し奉ら

ま 欲して今日の生日の足日を撰定めて此
 の奥床を移ひ清めて禮代と奉る者は奥山の
 眞榊を手折持來て二所に刺立て百取の机に
 種々の多目津物を置高成して備へ奉る状を
 甘らに聞召し受賜ひて此の居所に八十枉神
 の禍事^{まがこと}在^ありせず四方より荒び疎び來む物を拂
 ひ退^{しぞ}け賜^{たま}ひて御子孫の繼々^{つぎ}嚴^いし八桑枝^やの如^{ごと}
 く令^{さかへしめ}榮^{たま}賜^{たま}ひて堅石^{かき}に常磐^{とこ}に壽命^{いのち}長^{なが}く在^ありしめ
 賜^{たま}へと申^{まお}す事の由^{よし}を聞^き食^{しめ}せと白^ます

○日清戦争死歿者招魂祭詞

青丹吉奈良の都の公園を靈時と撰定めて奥
 山の眞拆木^まを根堀^ねにし持來^{もち}て二所に植立^うて
 尻久米繩^{しりくぬな}引延^ひて神籬^{ひま}成波^{なす}夜志^や齋^いひ奉^{まつ}り青幣^{あお}
 帛^き白幣^{しろ}帛^き取置^{とり}伊豆^いの磐境^{いわ}と移^はひ清^きめて靈標^{たま}
 を眞中^まに著^しく指立^さ靈魂^{たま}を招奉^ま坐奉^{まつ}て教正^{おし}姓^の
 名^な畏^{かしこ}み畏^{かしこ}みも白^まさく去^いにし明治^{めい}の廿七^に年^{ねん}六^{ろく}
 月^{つき}我^わ大^{おほ}八^や洲^{しゅう}瑞穂^{みづほ}國^{くに}知^し看^{しめ}す皇^{すめ}美^み麻^ま命^{のみこと}は天下^{あめ}の
 形勢^{かたち}を見^み曾^そなはして東洋^{とうやう}の平和^{へいわ}を思^{おも}召^めし支^し

那の國王に謀らせ賜ひしに彼國は頑鈍にして其の廣き厚き深き御旨を覺らず終に我皇國を侮りて戰を挑みければ我皇美麻命震怒座して大詔を降し賜ひ海陸の軍を出し給へり斯在れば海陸の軍人は青海原を渡りて彼國に趣き額に彈丸は的るとも脊には疵を負はトと雄々しき大和心を振り起して進み健び心に汚き隈を置かず直き赤き誠を以て夏の暑き日も冬の寒き夜も厭はず山行かば草

生屍海行かば水漬屍大君の爲にこそ死なめ閑には在らトと彈丸散る下も何のその劔の上も何のその眞木柱太き心を振立て、連戦連勝支那の國王も事適はトとや悟りけむ使と選みて我國に來朝りて降を請へり斯くて此戰爭の爲めに死じ軍人の御靈或は病みて倒れし軍人の御靈をも恤み歎かひ今年明治の何年何月何日に招魂の御祭典仕奉らんとて御酒御食種々の物を机代に横山の如く

置高成して備へ奉るを諸御靈等天翔り國翔
 りに來り給ひて御饗を受賜ひて往前猶遠く
 未た外國の賊無きに非らず若しも我國を侮
 りて刀向ふ讐あらば我大御國の神軍の御尾
 前に驅け從ひ坐して膺ち懲して服從しめ皇
 美麻命を知治す大御國を彌遠長に守護給ひ
 又汝命等の親族等をも放る事なく恵み幸へ
 給へと畏み畏みも白す

必教携 天理教祝詞文集 下巻終

附 錄

祭典式

祭典は神に仕へ奉るの禮典なれば前日より祭主已下祭員は潔齋
 して事に從ふべし
 祭典執行の當日第一の合圖の太鼓に依りて齋主已下祭員一同は衣
 服を改め正服を着して一所に相集り祭典に關する用意を爲すべし
 典儀及賛者は神殿に進みて諸事を點檢し豫て過なきを期すべし
 第二の合圖の太鼓に依りて齋主已下祭員一同は伶人の樂を奏する
 と共に次第に祓戸に進みて着席すべし
 祓主は進みて拍手禮拜して降神行事を爲し此間一同平伏す
 次に神饌長神前に進んで拍手禮拜し此間神饌掛は覆面を掛けて次
 第に立ちて神饌を傳へ献ず畢れば祓主は進みて祓除詞を奏す

次に解除掛は大麻を取つて齋主已下一同を禳ひ清む次に祓主進みて昇神行事を爲して着座するや神饌長已下神前に進みて神饌を撤す
次に恰人の樂を奏すると共に齋主已下一同立ちて順次神殿に向ふて進み着席すべし
次に齋主副齋主神殿遙かに禮拜し膝行して次第に進み壇に近づきて禮拜して覆面を掛けて進みて開扉す此間是一同平伏警蹕す
次に神饌長は神前に進みて柏手禮拜し此間に神饌掛は覆面を掛けて次第に席を離れ神饌を傳へて献ず
次に齋主神前に進みて二拜四拍して祝詞を奏す後取は之れに従ひ左の脇に在りて祝詞を渡し齋主の奏し畢りて其祝詞を受けて退くべし

次に神前に玉串案を設け齋主已下祭員一同順次進みて玉串を献ず
次に神饌長神前に進み柏手禮拜して神饌掛と共に神饌を撤すべし
次に齋主副齋主神前に進みて閉扉す
次に退場の奏樂起るや齋主已下祭員一同着座の儘二拍して順次席を離れ神前に一揖して退場すべし

葬 祭 式

死は人倫の大故なれば其儀式の重んずべきは申す迄もなく人の息絶ぬる時は其死者の面に白布又は白衣もて蔽ふべし枕邊には守刀を置き机又は八脚を枕邊に置き据ひて洗米御水堅鹽などを供ふべし
次に親族の一人盥嗽して家の神床に進み何某死亡せし由を申上げ

神床の戸を閉づべし若し閉ざすべきの戸なければ白布又は白紙を以て之を蔽ふべく靈舎に進みたる時も同一の取計を爲すべし次に教會所に到りて其由を告げて葬祭を依託すべし而して葬祭の日を取定めて戸籍役場に到りて死亡届を差出し其證明を得て墓地管理者の宅に就きて其旨を届け豫め埋葬に關する用意を爲し置くべし

齋主は豫め喪事掛を定めて靈牌墓標柩等を造らしめ其他神饌等に關する一切の事の用意を爲さしむべし

依頼を受けたる齋主は其喪家に趣きて歸天奏上祭を行ひ次に遷靈祭鎮祭等を行ふべし

葬祭に關する時の柏手は忍手とて總て音を立てざる様柏つを宜しとす

葬祭の日は發葬祭を行ひ齋主已下喪主喪婦親族會葬者は順次玉串を献じ畢れば出棺す

次に墓所に到りなば献饌して齋主柩前に進みて誄辭を奏し次に埋葬祭を行ひ齋主以下喪主喪婦親族會葬者順次玉串を献ず

次に棺を壙中に下して埋葬する時は親族の者兩三人留りて其側に在りて注意すべし

次に家に歸りて祓除式を行ひて家内を祓ひ清めて後靈祭を行ふべし

葬祭の翌日は齋主を招きて靈前祭并に墓前祭を行ふべし

十日を経なば十日祭を行ふべし五十日の間は毎日酒饌を供へ其日來りて靈牌を遷して代々の靈舎に合祀すべし

百日に至りて靈祭式を行ひて墓標を除きて墓碑を建つべし

毎年春秋の二季には教職を招きて靈祭を執行し祖先の神靈を慰むべし

附 錄 終

○ 行 列 次 第

(一) 先 追

袴

(二) 乘 乘 炬 炬

白 白 丁 丁

(三) 箒 箒

白 白 丁 丁

(四) 白 紅 旗 旗

白 白 丁 丁

(五) 紅 白 旗 旗

白 白 丁 丁

(六) 辛 櫃

二 白 人 丁

(七) 裝 裝 束 束 師 師

直 直 垂 垂

(八) 伶 伶 人 人

直 直 垂 垂

(九) 白 紅 旗 旗 白 白 丁 丁

(十) 紅 白 旗 旗 白 白 丁 丁

(十一) 副 齋 主

符 衣

(十二) 銘 旌

白 丁

(十三) 製 製 花 花

素服

(十四) 小榭

素服

(十五) 柩

喪人素服

輿丁四人

(十六)

齋主

齋服 從者白丁

(十七) 替者直垂

(十八) 墓標

白丁

(十九) 喪主

素服 徒跣

(二十) 喪婦

素服

(二十一) 親

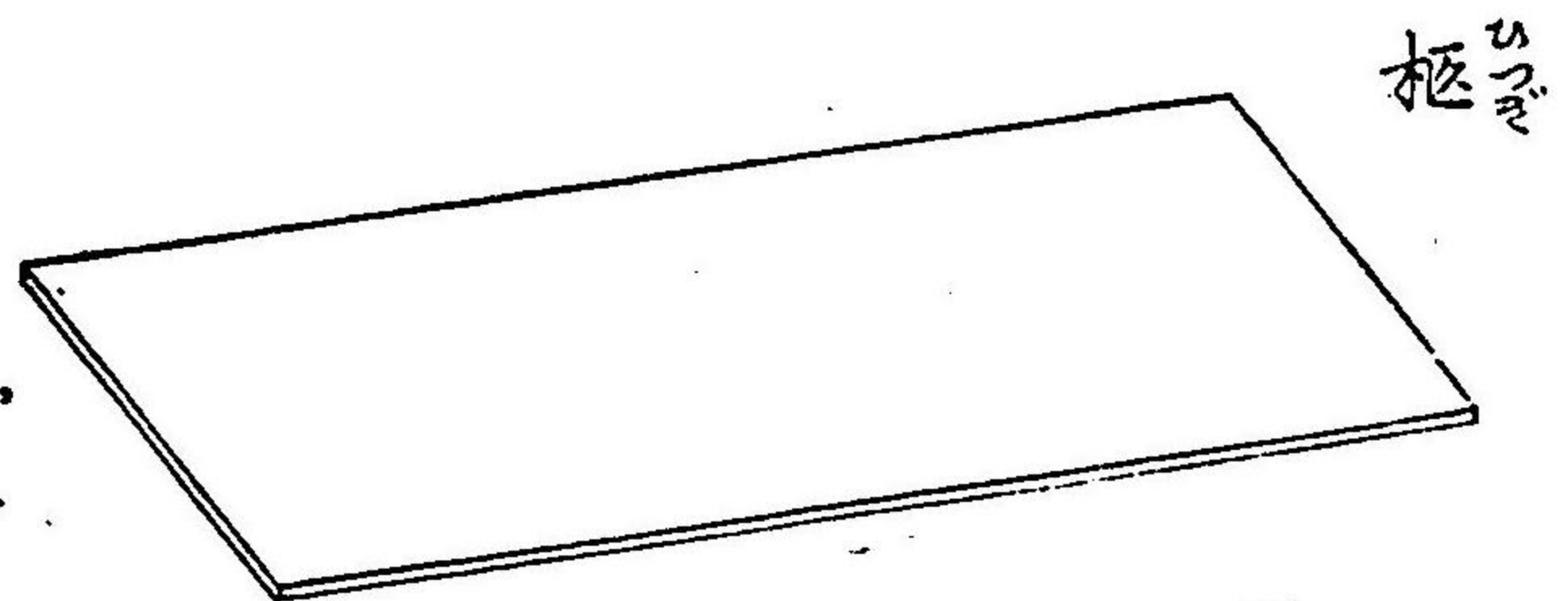
族喪人素服

(二十二) 喪專掛

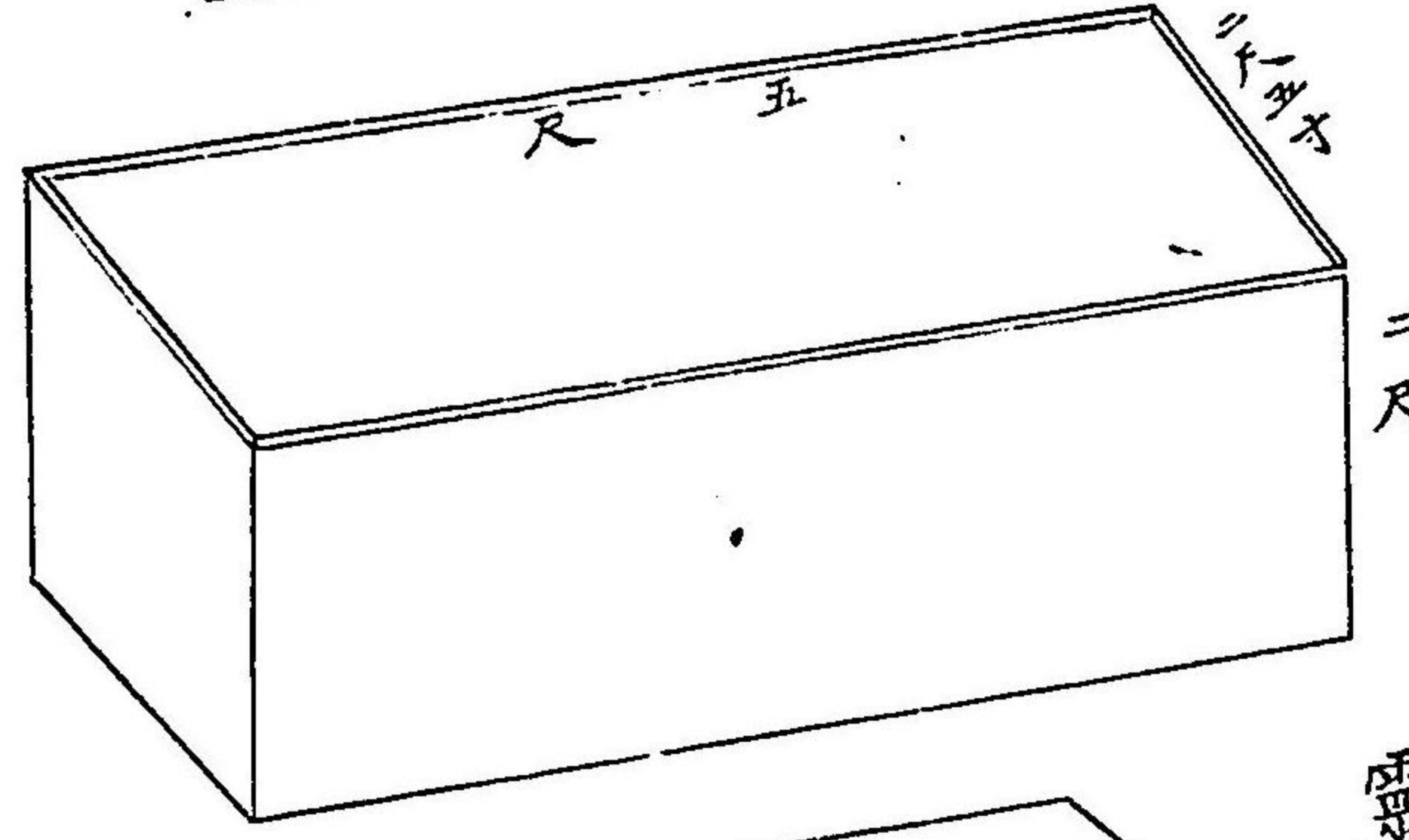
(二十三) 會葬人

(二十四) 後押

椅

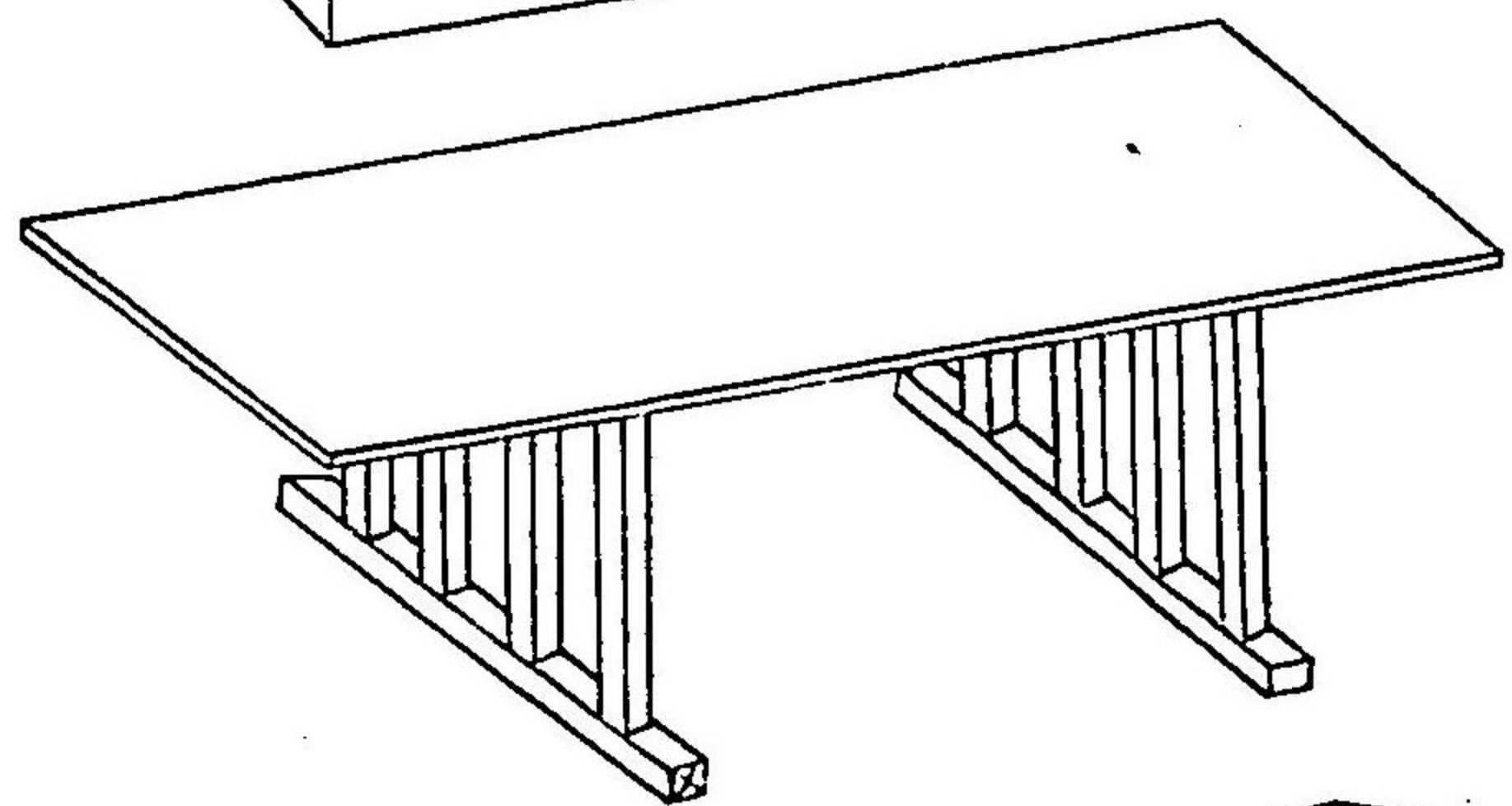


柩

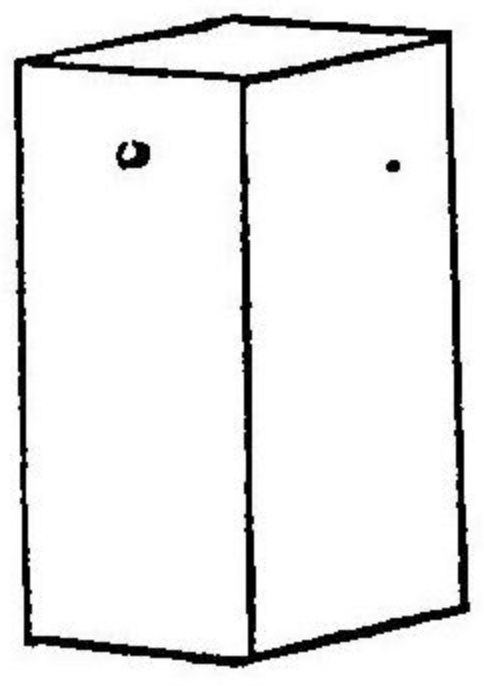


二尺

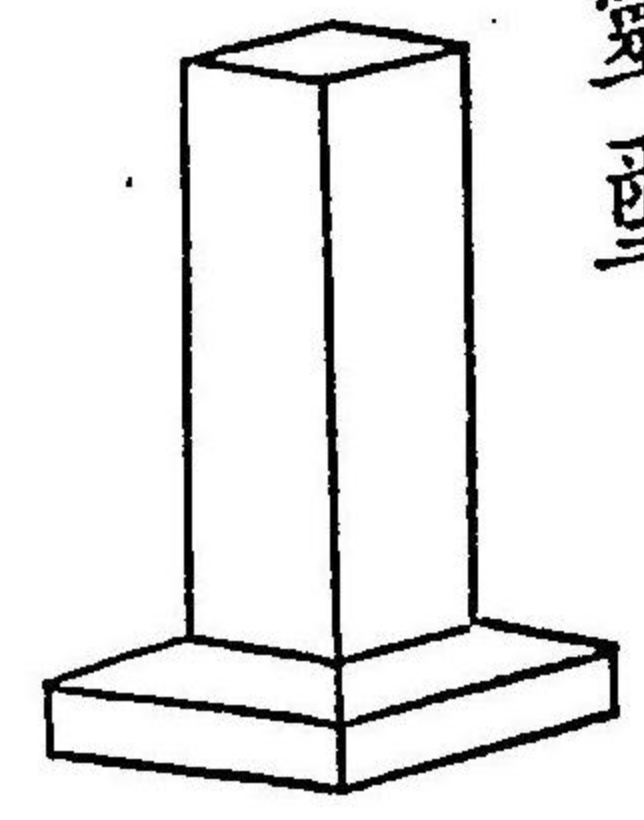
靈床



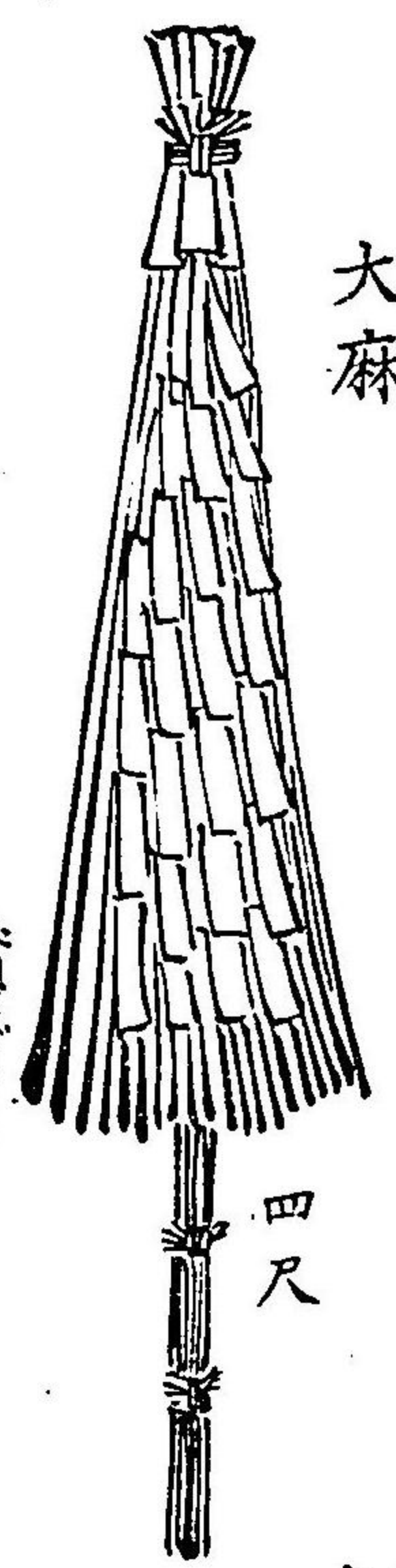
靈壘



靈壘蓋

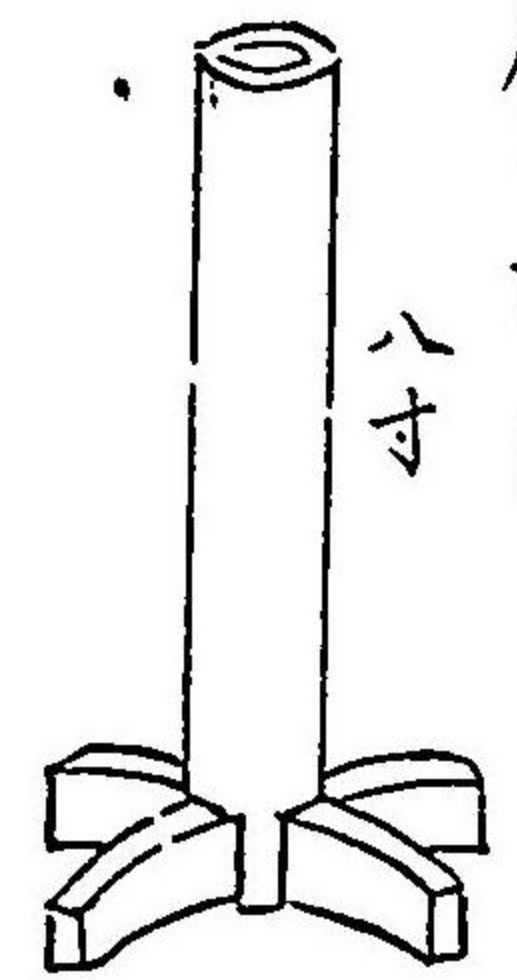


大麻 おほほぎ



四尺

大麻又八手串筒 おほほぎ たまぐし



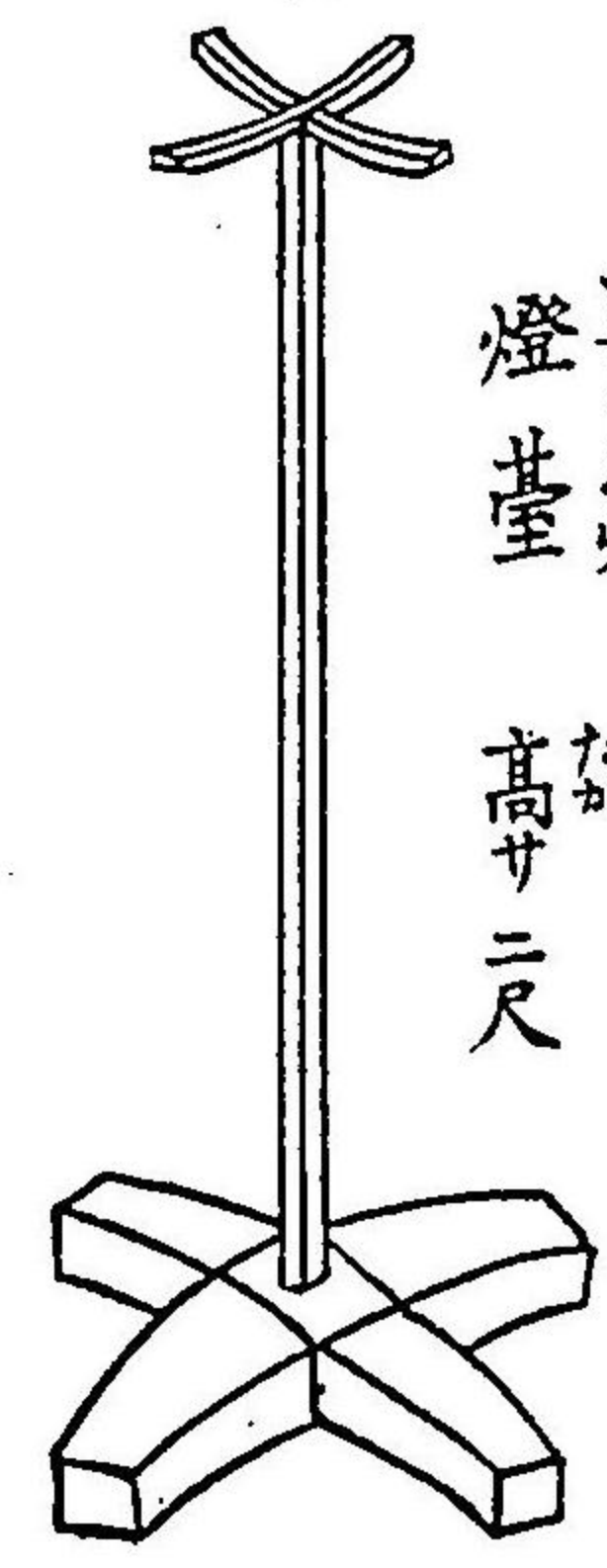
八寸

神 かみ 三尺

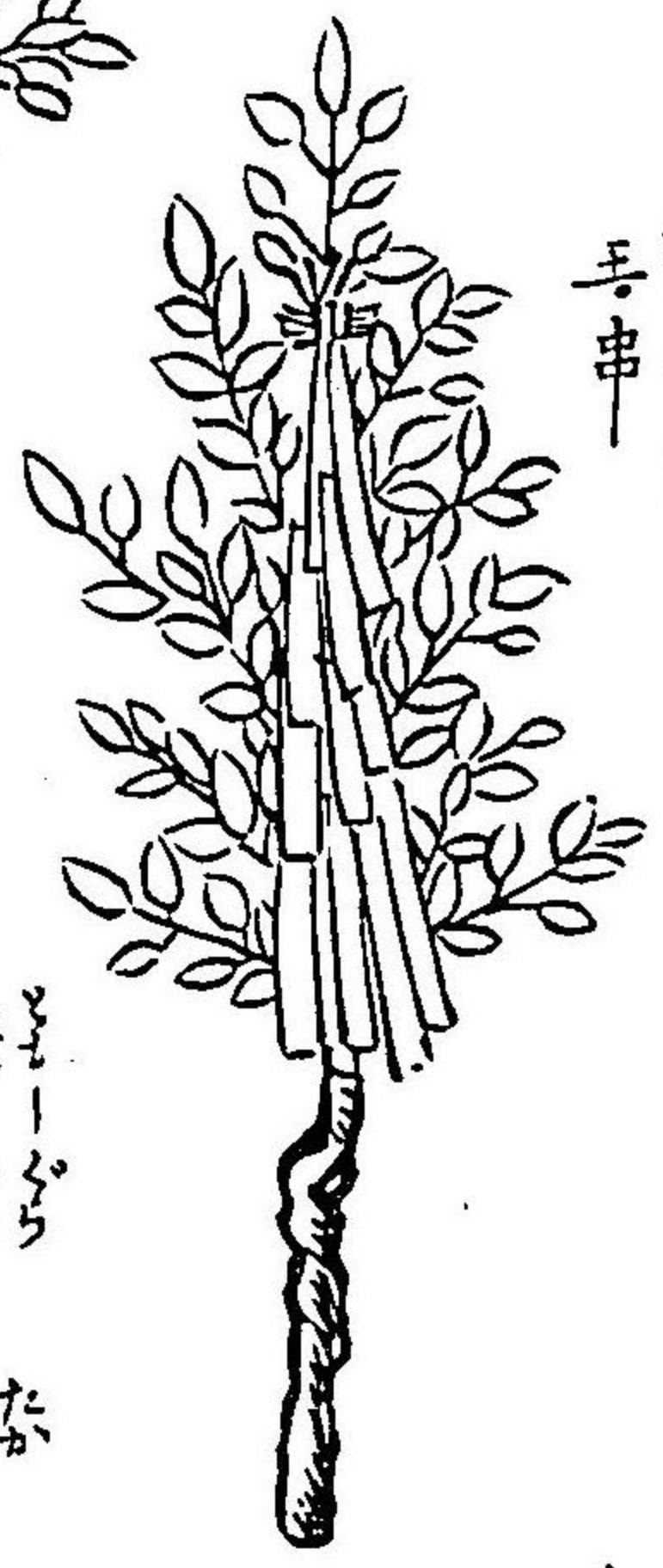


燈臺 とうだい

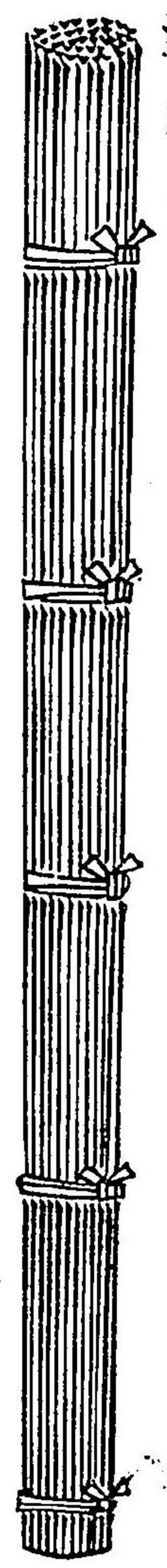
高廿二尺



手串 たまぐし



兼炬 たか たいヨウ



紅白旗 あかしろ

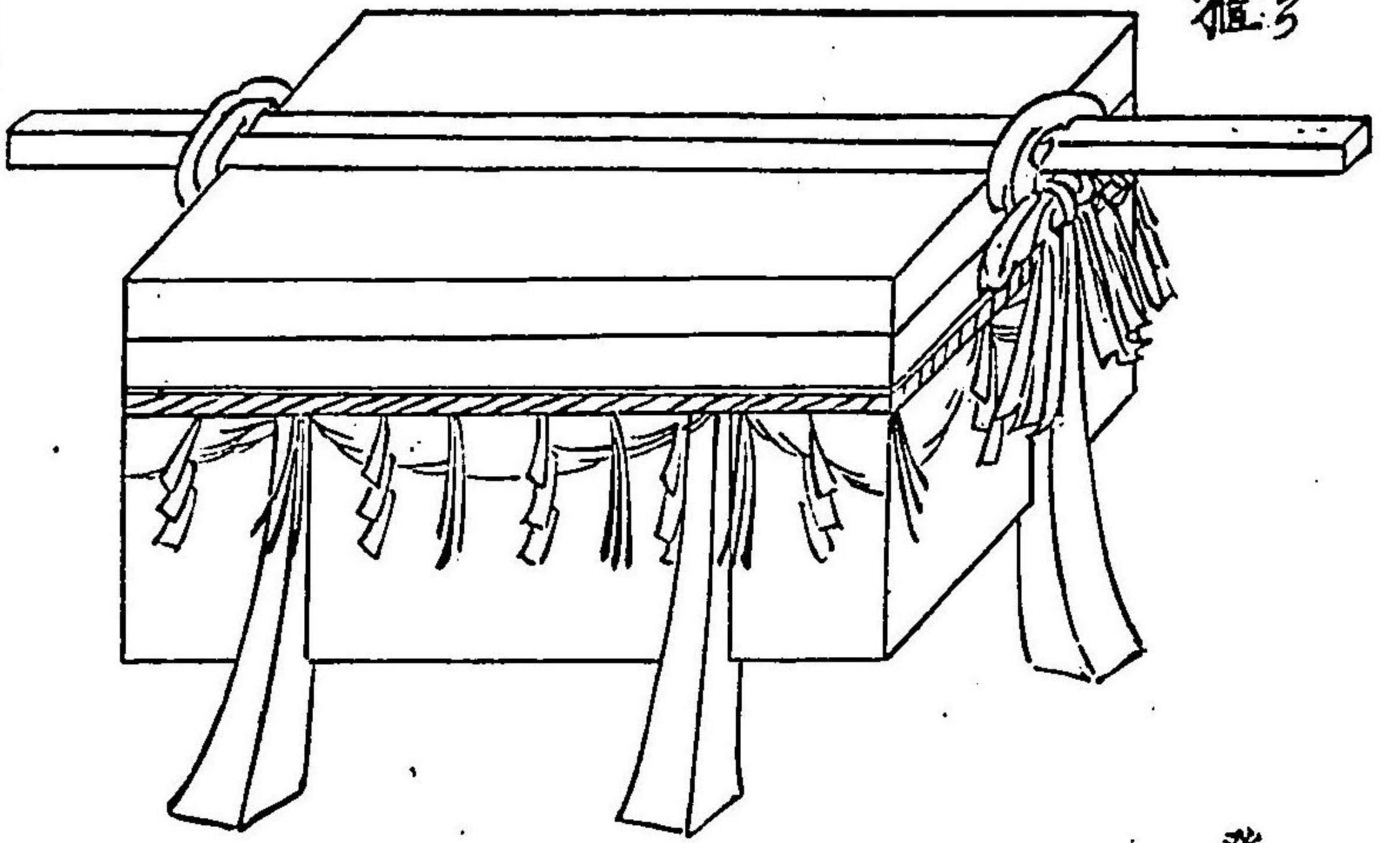
八尺五寸



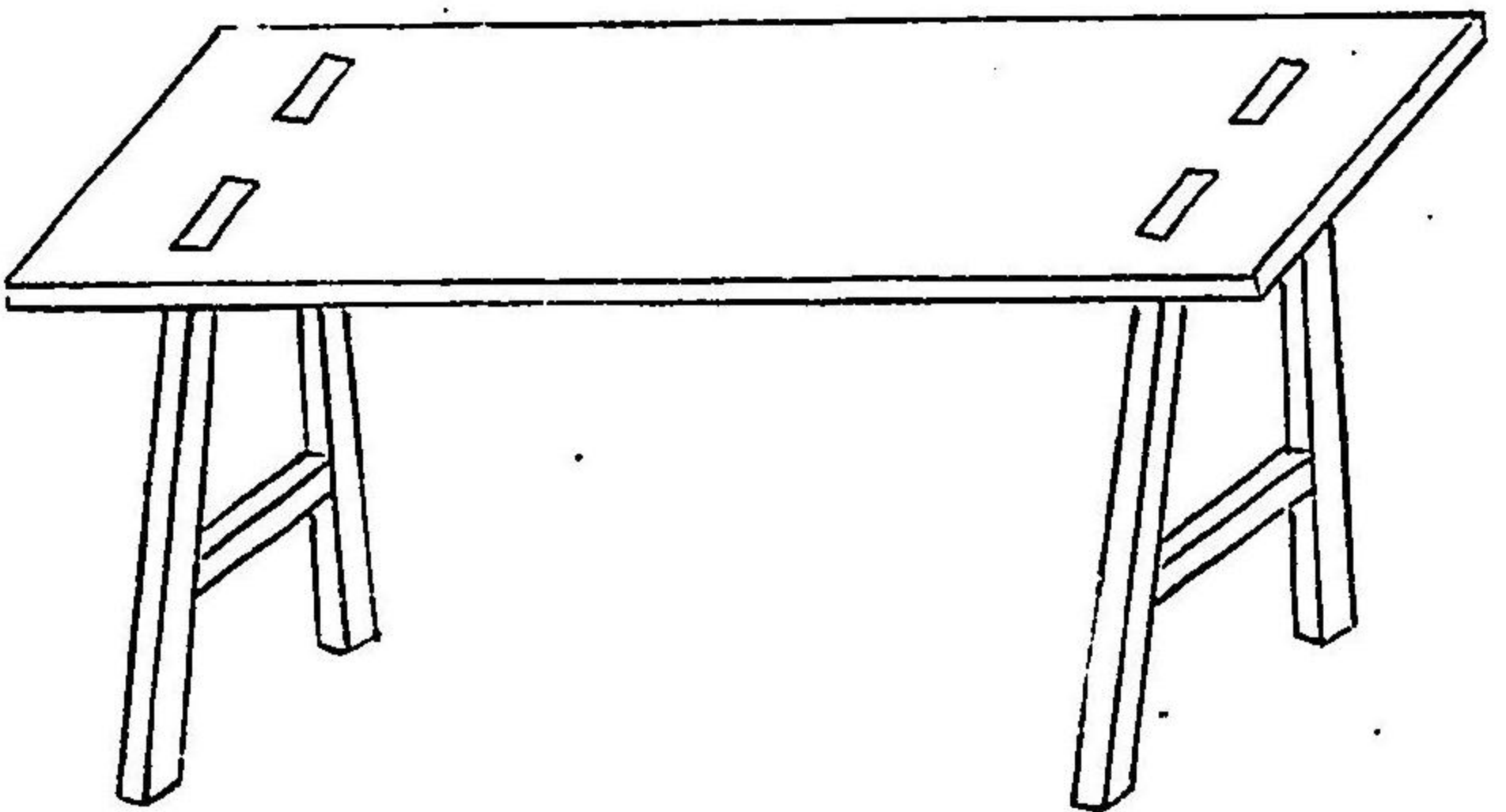
名旗 なまき



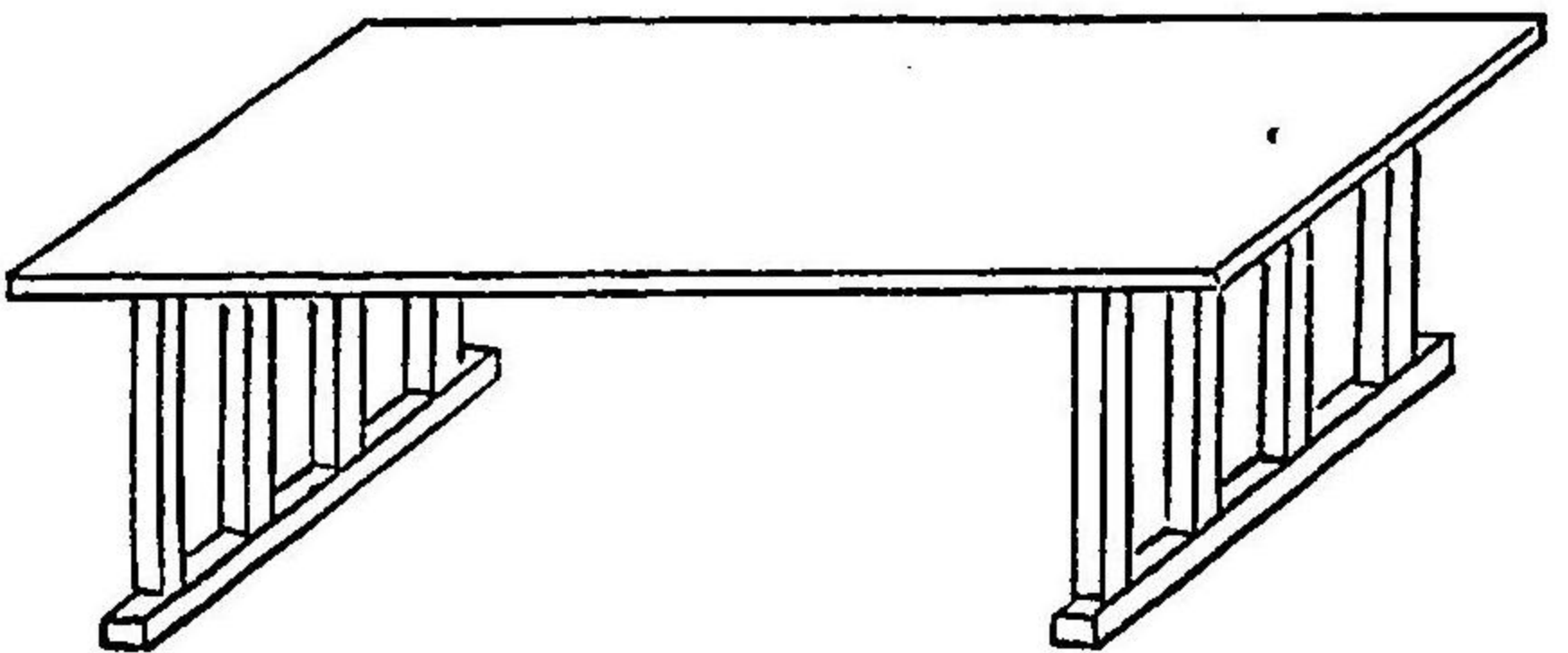
辛ツ櫃ツ



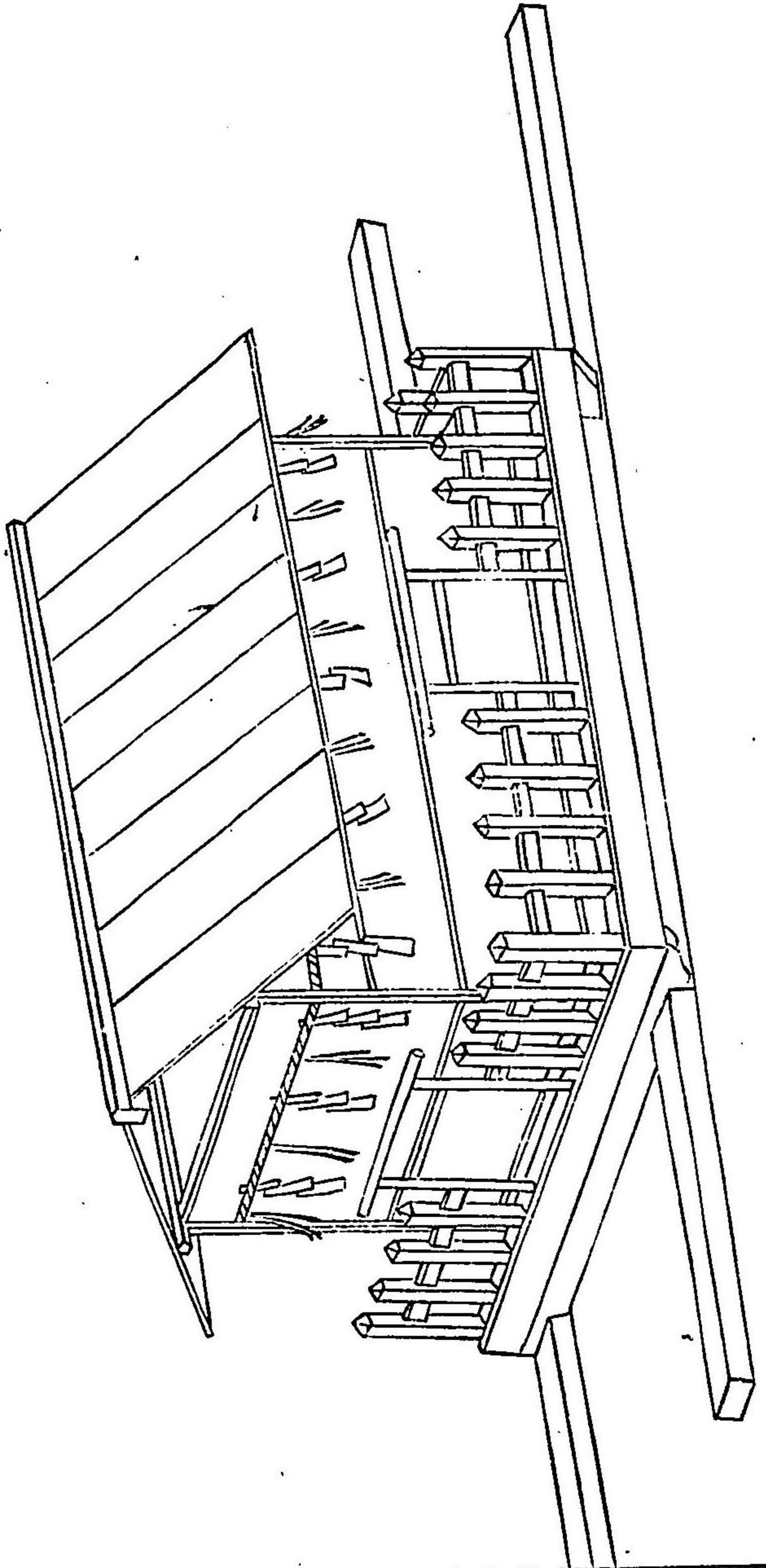
莞子



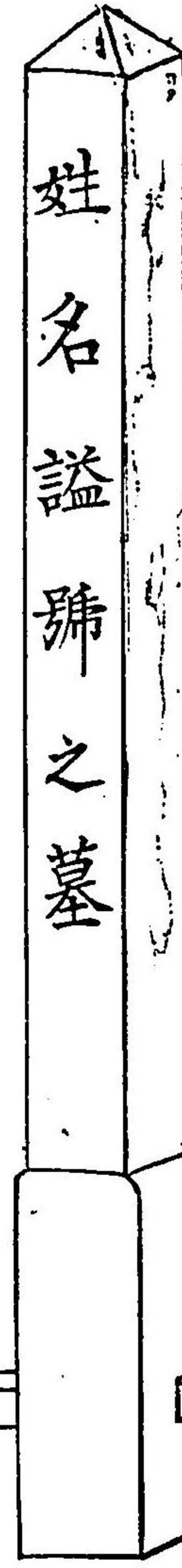
おほぬま 大ヨイのうま
大麻又八王申案



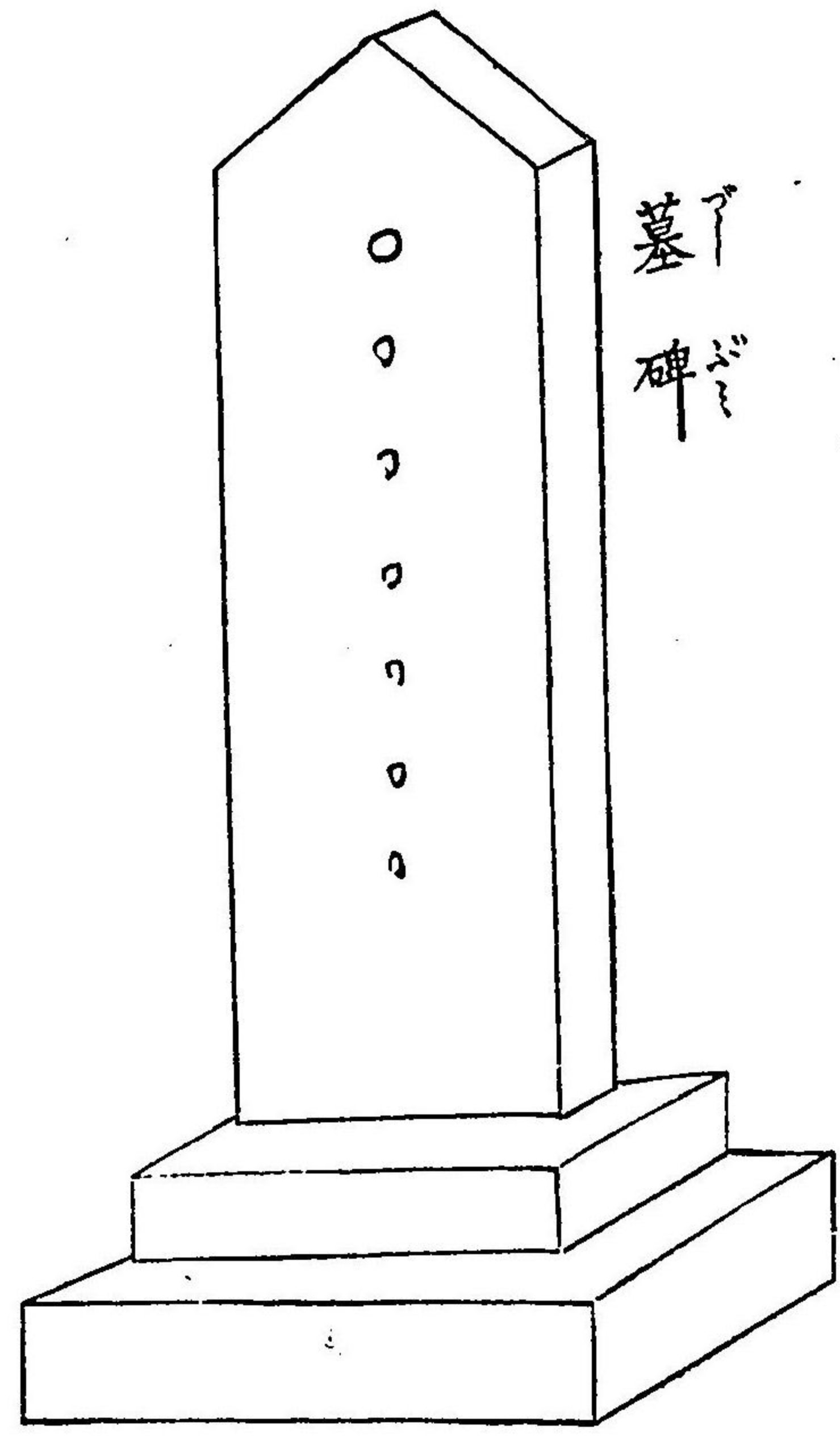
おほお大ほ峯かみ



墓標



墓碑



明治三十四年八月五日印刷
明治三十四年八月十九日發行

（正價金四十五錢）

複製不許

編纂者 交盛館編輯部

發行者 武田福藏

印刷者 岩井龜次郎

大阪市東區南久太郎町四丁目八十六番屋敷

奈良縣山邊郡丹波市町大字三島七番屋敷 今村書店

奈良縣山邊郡丹波市町字三島五番屋敷 木下松太郎

奈良縣山邊郡丹波市町字三島 中田書店

奈良縣添上郡帶解村大字今市一番地 木原文進堂

奈良縣添上郡帶解村大字今市 井久保書店

販者賣

